

耕地の半分は稲作、半分は果樹栽培に心血を注ぎ、今日までの長い戦後を守り続けてまいりました。

私の手元に今日まで残された軍属当時、昭和十五年第一次論功行賞の国債がそのまま残されています。

生き残った

沖繩戦の初年兵

沖繩県 永山 清栄

◎ 津堅島の守備へ

昭和十九年十月十五日、十（十月十日の沖繩大空襲）空襲後間もなく、与那原の球第四一五二部隊重砲隊へ入隊。一月三日、第一期の検閲が終わり、午後三時ころポンポン船に乗って津堅島に配置になった。その人数は、三十九名（入隊した初年兵約八十名。中隊長が亭島大尉、教育下士官として福西伍長、他に助手が四名いた。そこで三月上旬ごろまで軍事教育を受け、三期の検閲も終えた。

その後擲弾筒、通信隊とそれぞれ別れ、私は十二センチ砲歩兵として配属された。ここでは実弾射撃の訓練があった。その後、下士官候補の希望者を募っていたので、私も応募した。下士官候補は重機関銃の訓練が必要と言われ、しばらくその訓練に励んでいた。

◎ 米軍の来攻

昭和二十年三月二十三日、空襲があった。十月十日の空襲同様一日限りの空襲と思っていたら、連日の爆音に恐怖を感じていた。小隊長は壕の中で全員を集めて、「いよいよ、これから本格的な戦争が始まるんだ、だから気を緩めずに」と言っていた。

とうとう、二十四日から久高島沖に敵艦が現れ、知念方面へ艦砲が始まった。私たちも、いよいよ、沖繩で本当の戦争があるなあと、実感すると同時に身の毛のよだつのかを感じた。

間もなく、ケラマに上陸の報に接し、また四月一日に北谷方面から敵の上陸が聞かされた。

その頃から、昼は飛行機の機銃があり外に出ることが危険になった。だから、夜になるとタコ壺の壕掘り

など、戦闘の準備に余念がなかった。

八日、午前十時ころ、いよいよ駆逐艦が入って来た。本部からは、「何故駆逐艦をここから入れるのか、撃て」と、言う命令が出た。命令どおり、野砲一門、十二センチ砲一門、それぞれ、撃つてはみたものの軍艦の返礼が怖くなって逃げ帰って来た。

中隊長は、この島にも近々、敵が上陸する事態を予想していたのか全員集めて、恩賜の煙草と酒をふるまって「いよいよ敵の上陸も必至だ、そのときは皆大和魂を發揮して、勇敢に戦ってくれ」と、言う訓示があった。

予想は的中し、十日間、こんな小さい島に戦車、四十台くらい、兵隊が上陸用舟艇の十台分が上陸して来た。

◎ 守備隊の死闘

迎え撃つ我が兵は、一個中隊の砲兵と歩兵一個小隊、合わせて二六〇人くらい、前にも書いたように武器は野砲一門、十二センチ砲一門、擲弾筒などだったが衆寡敵せず。二日間の戦闘で惨敗だった。残った兵は、

わずか五十三人、三百人余（防衛隊含む）の我が兵はこの小さい島で死傷した。

とうとう、残兵の五十三人は引き揚げるとの本部からの指令が来た。しかし、隊長は多くの部下を失い「死なば共に」と引き揚げ指令に反発し、しばらく応酬のやりとりをしていたが、大隊長命令とあつて従わざるを得なかったようである。

◎ 恐怖の海を突破

四月十三日、生き残りの兵、全員津堅島の西海岸のトマリ浜と言う所に集まった。小船は全部で九隻、全員が乗れる船はなく、とうとう負傷兵と軍医（東風平村出身島添楽文）は残ることになった。私は同郷の誼みで島添軍医にあいさつに行ったら「沖繩は広いから助かるよ。命を大切に」と言われた。

元氣な兵は五十三人、勝連半島に渡ることになった。部隊命令は「海からでもよし陸からでもよし、何日かだろうが部隊に帰って来い」とのことであつた。

勝連半島に着くと、早速小船を木陰に隠し、昼の空襲に備えて壕を探した。海辺には敵も来ないらしく、

青年が砂浜で遊んでいた。その人の話では、これから島尻に行くのは困難だと聞かされた。

翌晩、全員で話合いの結果、もう米軍の中を突破することは困難だと確認した。十四日、夜九時ころ、小船に分乗した。

私と行動を共にしたのが、下士官二人、上等兵一人、と私、船頭、合わせて五人だった。船頭は津堅出身の十七歳の少年だった。隊長は海に出たら、合図は船の横を叩くか、櫂を上げるかの信号を出すから共に行けとの命令だった。

中城湾に入ると、軍艦の打ち出す砲音は凄まじく、大変な恐怖だった。艦船は次第に近付く、どうしようかと迷っていたら下士官は船は一直線に並べとの合図だった。こうして大型艦船の横を通りながら、砲弾一発でいちころだなあと肝を冷しながら通り過ぎた。

船を漕ぐ櫂も学校の教室の床板で作った、代用していたものだったが、軍艦の横を通り過ぎると命懸けで漕いだ、早く島に着きたい、皆同じ気持ちであったろう。私は飯盒を持っていたので、船の中に入ってくる

海水を、その飯盒で汲み出しているうちに、誤って船の中に落とし音をたててしまった。前に座っている上等兵にいきなりビンタを張られて痛い思いをした。

当時、私の「氏」は金城だった。上等兵が「おい、金城、ここからはどこが一番近いか」と聞かれた。

「佐敷が近いです」と答えたら「じゃ、一秒も早く着いた方がいいから、佐敷に向ける」と言うことだったので、佐敷に方向を変えた。その時刻は干潮時であった。船を力いっぱい漕いでいたので岩礁の上にガリガリと音をたてて乗り上げてしまった。びっくりして潜水艦に突き上げられてしまったんじゃないかと思っていた。櫂で突いてみたら石であった。三人が船から下りて「ヨイシヨイシヨ」と船を引つ張って出した。ここまで着いたからには、与那原へ行こうということになり、しかし、着いた所は板良敷であった。時は午前三時五分、約七時間くらいはかかっていた。

◎ 本隊へ合流

そこで船を捨てて、本部陣地へ向かった。本部へ着いてみると、暗いうちに壕の上で点呼をとっていた。

「戦争になって、点呼もクソもあるか」と、うちの士官は怒っていた。本部は大里公園の北側にあった。

私たち五人は、隊長の前で「津堅一中隊・森坂伍長以下四名、ただ今海上突破で到着しました」と報告した。部隊長も「ご苦労さん」と言っていた。

私たちの船が最初に無事辿り着いたが、他は二、三日遅れて、海岸沿いに来た者、また久高回りで来た者もいた。敵陣の中をくぐって全員が揃ったのも不思議だった。

その後、私たち第一中隊は、海上突破の労を労うために、喜良原（玉城村）に行つて体力を養っていた。そのうち海軍がいたと言われていた喜良原陣地に、十センチ砲の榴弾砲が二門あった。それを私たち第一中隊が使うようになり、その砲の操作訓練をした。

そのころ、浦添、嘉数高地の方も、激しい戦闘が繰り広げられている頃であった。そのうち、首里司令部にも米軍が攻撃をかけてきたが、私たち第一中隊と知念に陣取っていた第三中隊は本部に集合を命じられた。それは戦艦「大和」が沖繩戦に参加するからだといっ

ていた。

戦艦「大和」が沖繩戦に参加すると、米軍の艦船や戦闘機が「大和」を襲撃している間に日本の爆撃機が、沖繩の米軍を爆撃しようとの作戦のようである。そのために、日本軍と米軍との境界が机上から分かるように、目印をやれとのことだった。

夜の目印には最も火がよいだろうとのことので我々初年兵が焼け残った家に火をつけ、目印にしたが、一向に友軍機は見えず、あとで分かったことだが戦艦「大和」も、友軍機も沖繩へ到着前にすでに米軍の餌食になったようである。

◎ スパイ容疑で銃殺

目印をして帰つて来たとき、中頭の人（当時七十歳くらい）が第一中隊の陣地前に来て、壕を覗き回っていた。そこへ普段から根性の悪い田盛兵長が便所から出て来るところを、そのオジョーと出会い、すぐ、スパイとして捕まえてしまった。小隊長に申し出て「これはスパイだ、何故民間人がこんなところを覗き見するか」ということでこのオジョーは洞窟の入り口の木に

縛られていた。私は気の毒に思っていた。このオジーは共通語を話せなかったので、兵長の言うことが分からなかったようである。兵長の言うのに返事もできなければ、説明もできずに兵長の言われるままになって縛られていた。

私は便所に行きながら「オジー・ヌーンチ・ウマンカイ・メンソーチャガ」（叔父・なんでここに来たの）と尋ねたら、オジーさんは「ニーサンヤ・ウチナーンチュルヤルイ」（お兄さんは沖繩の人かね）と言っていた。

オジーの話では、「私は中頭にもいられないから、島尻に行こうと行って、家族全部で与那原まで一緒に来たが、砲弾で皆散りじりになり、行く先は玉城方面と聞いたが、こちら辺りにいるのではないかと、壕のありつたを探していたんだ、……兄さん、自分は方言しか話せないから、兄さんが訳を話してくれないか」と頼んでいた。しかし、日ごろからこの兵長は、性の悪い人間だったので、初年兵の私には怖くて、オジーの頼みも請うことができず、今でも心残りのする

出来事だった。

そのオジーは、三日くらい水ばかり飲まされ、そのまま縛り付けられていた。後で聞いたが、銃殺されていたとのことだった。

◎ 死地を脱して

第一中隊、第二中隊は本部に集合を命じられた。本部へ行くと、敵は早与那原辺りに来ている。各自陣地に戻りそこで一泊した。翌朝、朝霧で視界がきかず、ただ足だけしか見えない者が近付いて来た。上等兵が「あれは敵だ、見てこい」と私と奥間に命令である。「もし、敵であれば発砲せよ、そうすればこちらから機関銃で援護射撃する」といつていた。

私と奥間は、もし敵であれば最期だ、あれは間違はなく敵だ。二人は死を覚悟してだれが生きようが、生きた人が遺骨を家に届ける約束を交わしていた。私たちも、死地に行くのは足が重い、草叢から匍匐前進で行くのを見て、上等兵は「何をポヤポヤしているか」と叱った。

その瞬間、敵に発見されてしまった。そのとき、上

等兵が近くに來て、手榴彈の栓を抜き、叩いて逃げようとしたが、敵の小銃弾が当たり倒れてしまった。すぐ私たちの目の前で出来事であった。私は伏せた。そして近くの水溜り（砲彈の穴）に入って敵の立ち去るのを待った。水の中で約二時間、鉄兜をとり、鼻だけ水面に出して呼吸していた。

米兵は近くで壕を掘っている様子だった。私はここでの長居に危険を感じ、右側の絶壁を利用して逃げる決心をし、米兵が銃を取って撃つまでに七秒くらいはかかる、それを計算に入れて、崖の縁から命がけで飛び下りた。案の定、米兵の銃弾が私の前後にブスブスと飛んできたが大丈夫だった。本当に九死に一生を得た思いである。こんな経験があるので、もう逃亡しようかと迷ったが、やはり元に戻った。これも大和魂を打ち込まれた精神教育の差だったのだろう。

そのころ、本部も駄目だから稲福に下がるようにとのことだった。前にも書いたが、本部は現在の大里公園の北側、そこから稲福まで夜を徹して歩いていった。

稲福では、また本部の洞窟を奪回しようとして総攻

撃をかける作戦である。私は初年兵であるが、無理な話だと思っただけ、上官への進言はできず、命令に従って戦友と行動を共にした。一列縦隊になってスキの中、竹藪の中を潜っていった。夜が明けて見ると、あまり進んでなかった。

そのうち、上から射撃され、ほとんど兵がここで倒れた。第二中隊が間もなく「稲福の線に下がれ」の命令である。仲間はある程度下がっていった。私はあまり激しかったので、人が持てるくらいの石の影に隠れ一人じつといた。広い場だから逃げたら撃たれると思っていた。死んだ振りをして、石の側にいた。しかし一人残されて気味悪くなり、とうとう自分も意を決してそこから逃げた。危険を感じていたが、そのとおり後ろから撃たれて右手に傷を負った。血がドンドン出たので三角布で縛っていたらようやく血は止まった。

稲福に着いたら握り飯がきていた。二度目の死地を脱して食にありつける思いは何とも言えない。

◎ 部落（当銘）に帰って

その後、山崎少尉（北海道出身）の指揮で、また反

撃に出ようと全兵士が集められた。私も参加しようと思つて行つた。

小隊長が「金城、傷は」と聞かれたので見せたら「これくらい何でもないと」言つたが、何を考えたのか、また呼び戻され「医務室へ行け」と言われた。私は医務室へ行くために下がつた。だが、この戦いは負けるかもしれないと思ひ、まずは部落に帰つてみようと思ひ、東風平のブルソージを横切つて東風平三叉路まで来た。そこはメチャクチャに地形まで変容してゐた。水の溜まつた弾痕には、子供が溺れてゐたが、砲弾が激しく、救うこともできなかった。

島（自分の部落）に帰る途中、豊一さんの奥さん（ユキ）と南又神谷のグジーさん（糸満に行つてゐる）と出会つた彼女たちは、お父さんに弁当を届けに行つての帰りのようだ。長毛の所に差しかかつたら、一列に並んで民間人が倒れてゐた。駆け足で島に向かつた。島についたら、大部分は疎開してゐないのとこゝとだつた。屋号前東風平赤峰に避難民が寄り集まつてゐた。そこに赤峰亀三さんが来てゐた。二人は前東風

平で二晩泊まつた。彼はまた部隊へ帰る（具志頭）と言つてゐた。

◎ 患者の壕を探して

その後私は、部隊（医務室）に帰ることにした。医務室は今の月城の町の近くにあつて壕は横堀であつた。そこでも南下の支度をしてゐた。患者には「軍の命令で自分で歩ける者は南下せよ」だつた。歩けない者は青酸カリを配られ、「これを飲んだら傷はよくなるよ」と言つて配つてゐた。

足を怪我してゐた、タケ三郎（同年兵）も歩けないから残ると言つたが、「五分でも十分でも長く生きろ」と言つて、私が抱えて歩いた。痛がつて五十メートルくらいしか歩けない、それでも二人一緒に行くこうと努力した。

全員、仲村渠の湧川の近くを目標にしてゐた。私たちもそこまで行けば、水もあるし、どうにかなるだろうと言ふことだつた。やつとの思ひで二人は辿り着いた。

そこでは、患者を収容する壕を探しに五人が選ばれ

て出掛けた。私も含めて沖繩出身三人と他県人二人だった。壕を探して患者を収容する態勢を整え、一応その壕に患者を移した。その壕の前で、私たち五人を集めて具志堅大尉が「今度の戦争は負ける、しかし、捕虜には絶対なるな、生きて戦争の行く末を見る」と言っていた。しかしその大尉も、後で戦死したことを聞いた。タケ三郎は生き延びていた。

その後、港川へ行き、前川ガンガラーに行ったが、そこに望みがないということで具志堅を通った。道路は避難民の群衆でいっぱいだった。首里から敗走する軍隊、中頭や那覇からの避難民の群れである。

途中、与座、仲座の農道を歩いていたら、後ろから自動車の音がした。ライトもつけず、警笛も鳴らさずにだ、何を積んでいるのかもわからないが、非常に速度をあげて行った。「アツ、大変だ車だよ……」と言ったのだが、逃足の遅い人たちを轢きながら通り過ぎた。軍の狂暴さは敵の砲弾同様である。摩文仁に行ってみたら、避難民やら兵隊が混在して人とも思えないほどに右往左往し、壕を探していた。焼け残った大き

な瓦屋根が一軒あった。そこで患者の治療をしようとして晩かけて患者を移動させた。

その家の台所で昨夜、赤ちゃんができたと言った。

どこの人だか聞かなかったが兵隊は、情け容赦なく彼らを追い出した。産婦は足に厚いボロ布を巻いていた。

この家も危ないと思って、摩文仁の丘辺りを駆け回ったが、どの壕も兵隊が入っていた。仕方なく南下して、米須の部落を通っていると姫百合隊の人たちがザルに芋や野菜を持って松林の中に行くのを見て、後ろからついて見たら、たて穴に入って行くようだったので、そこを諦めて他を探してみた。ところがどこへ行っても、二、三十人が避難できる壕は見付からなかった。空腹だったので焼け残った瓦葺きの家に入って、芋を掘ってきて、シンメーナビ（大きな鍋）に炊いて食べた。疲労は極限に達していた。患者はまだ摩文仁に置いたままだった。

とうとう名城部落の近くで横穴を見つけたので、そこに患者を入れることにした。しかし敵は近くに迫っていた。一週間くらいいたが、敵が来たので喜屋武部

落まで行ったら、もう袋の鼠だと上官がいう。ここで食料がなくなった。患者の薬も皆無の状態である。六月十四、五日、軍医の玉井中尉（中頭出身）が解散命令を出した。

◎ 死なば共にと

私は、宜野灣出身の我如古（同年兵）と二人で、壕探しもしたが探せず、それに食料もないし、迷っていた。そんな折、味噌が半分、油半分入った飯盒を道中で拾った。三日くらい芋を掘ってきたは、生芋に味噌をつけて空腹に入れていた。それからは食料探しを続けた。人家の前のイヌ小屋から、我如古さんが米を見つけた。一斗くらいだった。

部落内の夜道を歩いていると、手が落ちていたり、首から飛ばされて目も飛び抜けているもの、あつちこつちに死体が腐乱したり、当時の糸満は正にこの世の地獄であった。

名城の前の村井戸に、米軍の砲弾の止むのを待って、多くの人が水汲みに来ていた。そこを見計らって敵は集中して砲撃することがあって、多くの犠牲者が出て

いた。

我如古さんと二人は死なば共にと覚悟していた。海岸沿いに壕を見つけ、そこに隠れているとき、那覇の泊の人が兄弟二人（男子十二歳、女子八歳）が私たちの壕に飛び込んで来た。思いがけないことで皆びつくりした。話をよく聞いてみると、子供たちは父母と一緒にだったようだが、艦砲で家の屋根が崩れ落ち、父も母も押しつぶされたとのことだった。子供たちは三日も御飯を食べてないと言っていたので、一つの飯盒の御飯はその子らにやった。

最終的には突破だということであったが、自分は津堅から命懸けでここまで来たのもうここで死んでもよいと思っていた。ところが我如古さんは、どこで聞いたのか「中頭にはアメリカはいないらしいよ。だから皆各々の家に入っているらしい」と言って彼は早く突破したいと望んでいた。でも私は、名城から米軍がいくまでは、そこにいる積りであった。しかし周辺の民間人も突破だ突破だと言って騒ぐので我如古さんが「金城、君は行かないのか、自分はもう行くよ」と言

つていた。「まず行つてみなさい」と言つたら、我如古さんは、「もし行かなければまた戻つて来るから」と言い残して出掛けていった。

間もなく我如古さんが帰つて来た。「名城のところから高嶺村真米里の所まで、そこを通る人は皆撃ち殺されていた」と言つていた。「だから言つただろう、簡単に行つたらやられるよ」。

あと少し待つて見ようと言うことで一晩待つていた。突破するにも腹ごしらえをしてからと言うことで、村井戸に行つて水を汲んできて雑炊を炊いたら、変な味がした。おかしいと思つて村井戸に行つてみたら、何とそこには、兵隊が落ちていた。そして兵隊の肉はふやけて白い肉が見えていた。それを見た途端、気分が悪くなり吐き気がした。

今度は弾痕の穴に溜まっている水で、雑炊を炊いた。子供たちにも、飯盒一つ分けてやった。子供たちには「自分たちは兵隊だから、ここから突破して行くけれど君たちはここに残りなさい。敵が来ても逃げないで、手を上げるんだよ」と言つて米も分けてあげた。

日が落ちて、壕を見た。避難民も荷物を頭に寄せ、また棒で担いで、子供たちも大勢歩いて行く。僕らは避難民より先に行き、田圃の畦道にしゃがんでいた。

そこへ、米軍が二カ所から機銃を撃ち込んで来た。たちまち、阿鼻地獄に落ちた者の叫び声があがる、進退極まつて人々は全部死んだのではないかと思つた。私たちは撃ち止むのを待つて畦づたいに海辺へ出た。

海は満潮で、戦車壕まで海水が満ち、足も届かないほどだった。二人とも溺れそうになつたが、どうにか土手にすがり着いた。そこから、現在の糸満中学校を目標に田圃の畦を通つた。照明弾は足元を照らしていた。途中、人の声が聞こえた。最も恐れている英語のようである。ウチナーグチ（方言）にしては変だ、土を丸めて投げて見たが何の反応もない。「大丈夫、敵ではない」と確信した。近くまで寄つてみたら年寄りが撃たれてうめき声をあげていた。

私はこの辺の地形はよく知つていた。兼城のウマガーラという所は、昔から無気味なところで余り人が入らない所、だからそこを目標して行くことにした。

墓の横を通ったとき、途端にバラバラと敵の銃弾が飛んできた。我如古が先に倒れた。それを飛び越そうとして私も肩口から貫通された。隣に倒れている戦友の名「我如古、我如古」と呼んでも反応はなかった。死ぬ時は一緒に死のう」と誓い合った仲、彼は頭を撃たれて即死だった。

◎ 捕虜

今、逃げようにも逃げられない。あれこれ考えているうちに米兵が八人もやって来た。「手を上げろ」と言われたので、もうこれで最期かと思った。拳銃を持った米兵が近付いて来て、体をさぐるようにした。「立て」と言われ、後からも前から拳銃を突き付けられ連行された。行ってみたらアメリカ兵が、天幕の中にいっぱいいた。とうとう捕虜になった。時は昭和二十年六月十九日の朝だった。私の終戦記念日である。米軍のジープに乗せられ、豊見城の田頭の空き家がアメリカ軍の陸軍病院になっていた。そこで治療するために二晩泊まった。そこから屋良の収容所に三日くらしいた。そこには、元村長の比屋根方清さん、元助

役の知念友福さん、高良の野原栄昌さん先輩の方々が一足先に来ていた。「生きてて良かったね」というお互いの無事を確かめ合って涙を流して喜んだ。

その後、屋嘉に連行され、そして無銭旅行同然、P W（捕虜）となつてハワイまで行つて来た。